

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730532

研究課題名(和文) 幼児期の自己内対話にイマジナリーコンパニオンが果たす役割に関する発達の検討

研究課題名(英文) Inquiry into the roles of imaginary companions in infant mental dialogue

## 研究代表者

塚越 奈美 (TSUKAKOSHI, Nami)

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号：60523701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は幼児期のimaginary companionについて自己内対話との関係から検討するために、観察研究、質問紙調査、インタビュー調査などを実施した。その結果、主に次のようなことが明らかにされた。幼児の空想世界は他者とつながるための1つの手段として機能している可能性があること、ICは本人にとって家族のようにとともに励まし合う存在であること、家族は子どものICに対しポジティブに働きかけること、などである。

研究成果の概要(英文)：In this project, three researching ways such as observation, questionnaire and interview were conducted to investigate into the roles of imaginary companions in infant mental dialogue. The main results are as follows. There is a possibility that imagined world by infants functions as a way of being connected with others. Imaginary companions are the existence for infants to cheer up each other just like their family members are. Family members show positive attitudes to the fact that their children have some imaginary companions.

研究分野：教育心理学

キーワード：imaginary companion 自己内対話 空想世界 幼児期

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) Imaginary companion に関する研究

「Imaginary companion (以下、IC)」とは「子どもが空想によって作り出した目に見えないキャラクターのことであり、ある一定期間、子どもの日常の会話の中に出現する (Svendsen, 1934)」ものである。同義の用語には「Imaginary playmate」「Imaginary friend」などがあり、これらは日本においては「空想(上)の友達」や「想像(上)の友達」と呼ばれる。これらは適応に問題を抱える子どもに出現する特殊な存在として、主に精神医学の領域において臨床的事例報告を中心に研究が展開されてきた (Kanner, 1974; 大橋, 1984 など)。

近年では発達心理学の領域において、IC が健常幼児の心身発達に重要な役割を果たしている可能性が想定されるようになった。例えば、麻生 (2002) は『子どもの持つ「想像上の友達」が表面上消失し、私だけの世界で秘密裏に持てるようになることが、幼児期から児童期への子どもの移行を促すものである』と述べており、これは幼児の誰もが IC を有する可能性を示唆している。

しかし、これまでの IC に関する研究は、保護者を対象とした質問紙調査を通して、日本の子どもの IC 保有率を海外の知見と比較することに留まっており (富田, 2002; 2003; 塚越, 2007)、IC の実態や麻生が述べるような幼児期から児童期への移行の問題などについて十分な検討がおこなわれているとはいえない現状にある。

### (2) IC と自己内対話の関係

幼児は時に友達と遊んでいる最中に 1 人だけその遊びから抜けだし、自分だけの空想世界で遊んだ後、再び友達との遊びに戻っていくことがある。それは必ずしも否定的なものではなく、自分の空想世界に入る時間を持つことによって気持ちを落ち着かせたり整理したりすることによって、再び友達との遊びの中に入っていき勇気をためているととらえることもできる (塚越, 2010)。このように、一人でいる時間が他者とつながるためにも必要となる場合があると思われる。

また、幼児期は他者との対話だけでなく、大事な他者を内在化させ自己内対話ができるようになることが重要であるとされる。自己内対話は、時間軸の中に自らを位置づけ、過去経験をもとに常に「未来に備えて生きる存在」として人間を捉える視点に欠けている。「今、ここ」に生きる人間の存在意義を問うものとして、現在、哲学や教育学などの領域でも再注目されている (古東, 2011)。

本研究で焦点を当てる IC とは、幼児自身が生み出す幼児とコミュニケーションする存在である。つまり、幼児期の IC は自己内対話の 1 つの形態であり、子どもの気持ちの整理等を行うために必要な話し相手のような存

在となっている可能性が考えられる。以上のような理由から、幼児期の IC の実態について自己内対話との関係性から詳しく検討したいと考え、本研究に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は幼児期の IC に関する実態と、IC がどのような役割を果たしているのかということについて、自己内対話との関係性から検討することを目的とする。

研究の目的を達成するために、研究当初は主に (1) と (2) の方法を設定し、さらに (3) を追加で実施した。

### (1) 幼児の継続観察

IC を持つと思われる空想性の高い幼児を対象とした継続観察を実施した。他者とのかわり方や空想世界の内容とその展開の仕方 (誰とどのように何を共有するのか) に注目することによって、幼児が自己内対話 (気持ちを整理したりするため) の 1 つの手段として空想世界を展開させる可能性について検討することを目的とした。

### (2) IC の役割 (種類) の検討

大学生を対象にした IC に関する質問紙調査をおこない、過去に IC を有した経験の有無によって IC の認識や過去経験に違いがあるかを検討した。また、この対象者の中から過去に IC を有した経験を持つ者を対象に、IC がどのような存在であったのかをインタビュー調査によってたずねた。

IC を有する経験を持つ・持っていた子どもの保護者を対象にインタビュー調査を実施し、子どもの IC に対する保護者の認識や子どもの特徴などについてたずねた。

### (3) 幼稚園・児童養護施設を対象とした質問紙調査

養護施設児のウェルビーイングの観点から、移行対象や IC の発達の意義を検討している齊藤・向井・佐伯 (2012) の研究を参考にした。IC が子どもが置かれた状況の中で気持ちを整理したり落ち着かせたりするための役割をしているとすれば、様々な環境の下で一定数それが出現すると考えられた。そこで、齊藤らの研究を追試するとともにその出現率などについて調べた。

## 3. 研究の方法

### (1) 幼児の観察研究

対象児および選定理由：幼稚園に通う年少児 2 名 (男児 1 名、女児 1 名) を対象とした。年少児クラスを担当する教諭に対し、研究目的について説明し、担当保育者にクラスの中で空想の世界の広がりを持っている子どもを数名抽出してもらった。この中に予備観察

を通して研究代表者が対象児の候補として考えていた2児が含まれていたため、その2児に焦点を当てて観察をおこなった。

観察期間および観察方法：2013年1月から2013年10月までの10ヶ月間、対象児が年少から年中に移行する時期を挟んだ時期を記録したものを分析対象とした（観察は研究期間のうち3年弱に渡って行ったが、観察の間隔・記録量がほぼ一定だった期間について分析した）。観察時間帯は登園時～午前中の自由遊び終了までの2時間～2時間半ほどであった。登園から自由遊び終了までをノートに記録し、必要に応じてビデオ撮影をおこなった。その記録とビデオ映像をもとにPCでフィールドノーツを作成した。観察記録は20日分である。

#### (2) ICの役割(種類)の検討

大学生を対象とした質問紙調査：対象は大学生119名であった。質問内容は、年齢、性別、出生順位、きょうだい数についてのフェイスシート、および「好んでいた遊び」「サンタクロースなどの空想の存在に対する信念」「ぬいぐるみなどに人格を与えられた空想の友達」「目に見えない空想の友達」「空想の友達以外のお気に入り」に関する質問で構成された。

大学生を対象としたインタビュー調査：上記の質問紙調査において、ICを所持したことがあると回答した2名に対象に、個別でインタビューをおこなった。質問内容は、「好んでいた遊び」「サンタクロースなどの空想の存在に対する信念」「空想の友達に関して」であり、質問紙を詳しく掘り下げる形式で、特にICがどのような存在であったと感じるかなどについてたずねた。

保護者を対象としたインタビュー調査：ICを所有しているあるいは所有していた子どもの保護者5名を対象者とした。質問内容は、子どもの年齢、性別、出生順位、きょうだい数についてたずねた後、「好んでいた遊び」「サンタクロースなど空想の存在に対する奨励」「子どもとのかかわり方」「空想の友達」「空想の友達に対する保護者の態度」「空想の友達を所有する子どもと周囲の反応」「空想の友達が出現した期間での環境の変化・保護者である自身の心境の変化」などに関してたずねた。

上記～に関しては、富田(2002;2015)や山口(2007)を参考に、幼児心理学専攻の学生と議論し必要な項目を設定した。

#### (3) 幼稚園・児童養護施設を対象とした質問紙調査

幼稚園児の保護者120名と児童養護施設の職員120名であった。幼稚園児の保護者には

自身の子どもについて、児童養護施設職員には担当の子どもについての回答を求めた。質問紙は齋藤・向井・佐伯(2012)の15項目から11項目を使用した。

## 4. 研究成果

### (1) 幼児の継続観察

分析の結果、「登園場面」と「他児とのいざこざ場面」の2場面において、2児に共通性を見出すことができた。また、2児ともに独り言が多く、自分の考えや気持ちを整理しようとしている様子が頻繁に見られた。一方で「空想場面(空想世界の展開のさせ方)」については、2児それぞれ異なる世界を展開させていた。ただし、どちらも他者と楽しさを共有したいという欲求を持っていること、その相手が大人であることが多いという共通性がみられた。以下では、その場面のいくつかを示す。

登園場面：2児ともに登園時にスムーズに保育室に入っていくという共通点が見られた。ただし、登園を嫌がっているのではなく、登園時に自分がすべき行動が分かっていないのでもない。保育者や保護者などごっこ遊びが展開されるような場合、明るい表情になって行動の切り替えがスムーズに行われており、切り替え場面において他者との心理的交流を求めている様子であった。

#### エピソード 【登園場面】 年少クラス 1月 男児S

母と妹と登園してきたS。母が靴を脱いで保育室に入るためにテラスに上がっても、Sはテラスには上らずスキップをしている。

担任保育者が「Sくん、おはよう」と声をかけるが、気づかないのか返事をしない。保育者がSに近づいてもう一度声をかけると、返事はしないが振り返って保育者を見る。

Sに代わって母が保育室に入り、カバンを置いたりタオルをかけたりし、Sに外遊び用の帽子をかぶせ、上履きを近くに置いて帰っていく。

保育者が靴を脱いで上履きに履き替えるように促すと、「上履きを履かせて」と言うように上履きを保育者の前にポンと置く。保育者が「上履きを履いて、ピッ」と言うと、Sは嬉しそうな表情になって靴を脱いでテラスに上り上履きを履く。保育者が「次は、コートを脱いで、ピッ」と言うと、Sはコートを脱ぐ。ロボットになりきったかのように、保育者の次の指示を楽しみに待っている。「お部屋に入って、ピッ」と言われニコニコしながら急いで保育室の中に入るが、友達の母親がテラスに来るのが見えると、手ではさみを作ってカニ歩きをして近づいていく。

他児とのいざこざ場面：2児とも他児から強引な主張を受ける場面において、自分が正しく相手が間違っている場合であっても、言い返すことができないことが多い傾向にあった。特に女兒は、このような状況では、一人その場から離れて擬音を口にして空想世界を展開させている様子であった。

空想場面：男児は自分で考えたクイズを保育者や観察者、友達に対して出したり、自分の話を聞いた他者の反応を受けて、そこから更に物語を展開させたりするなどの様子が見られ、他者と自分の空想世界との共有を楽しんでいる様子であった。一方、女兒は他児がお弁当の準備や帰りの支度などしている場面から一人抜け出し、園内を歩きながら天井や空間を眺めては擬音を出すなどして、自分だけの世界を楽しんでいる様子が何度も観察された。ただし、女兒の空想世界が具体物を介して展開される時(例：ギターを弾くふりからティッシュペーパーの空き箱でギターづくりになる)、それに魅力を感じた他児が集まり女兒を中心に遊びにつながっており、それを女兒自身も楽しんでいた。

## (2) ICの役割(種類)の検討

質問紙調査：ICの所有経験についてたずねたところ、119名中30名(25.4%)が所有経験があると回答した。そのうち、現在も所有していると回答した者は1名であった。この結果は先行研究にあった10%前後(川戸・遠藤, 2001; 森口, 2014; 富田, 2002; 2003; 2015)という数値に比べ、高い値となった。この差は、先行研究では目に見えないICのみに焦点を当てた報告であったのに対し、本研究ではぬいぐるみなどに人格を与えられたICも含めているためと考えられる。

また、ぬいぐるみなどに人格を与えられたICについては、ICの所有経験にかかわらず否定的態度は見られなかった。これに対し、目に見えないICについては、ICの所有経験のない対象者はある対象者に比べ、否定的にとらえる傾向が強くみられた。

インタビュー調査：2名の対象者がともに、ICと一緒にいると安心し、家族のような存在であったとする点に共通性がみられた。具体的には、「ICとの関係はお互いに励まし合う存在であり、『大丈夫だよ』とお互いに言葉を掛け合っては安心していったような記憶がある」という回想が得られた。また、知らない場所に行くときに連れて行ったり、それを置き忘れてきた時には不安で寂しく感じ、手元に戻った時には安心感を感じたという語りもあり、ICが子どもの安全基地であることを示している。

「一人会話じゃないですけど、自分がいってピカチュウが言っていることにして自分で話していたのはありましたね。」「話しかけることは多かったと思う。名前を呼んだり

景色が見えるよとか。」「お花や動物に話しかけることも多かった。」という回答があった。このように、ICと会話や遊びは、本当は自分の一人二役のものであるという認識がなかったわけではなく、自分の気持ちを整理したり共有したりする相手としてそれを設定していた可能性が考えられる。つまり、自己内対話との関係性があると思われる。先行研究では幼児期にICを所有していた成人は所有していなかった成人に比べ、対象を擬人化する傾向が強いことも報告されている(森口, 2014)。以上からICを所有する者は幼児期から様々な対象に命があるように接する傾向があるといえるだろう。

また、好きな遊びについては両者ともにごっこ遊び、なりきり遊び、絵本を読むこと、お話を作ること、家の中で過ごすこと、テレビを観ることが好きと回答している。その中でも絵本を読むことについては、共通して絵本を保護者から読んでもらっていたことを回答していた。絵本などの読み聞かせは想像力を育むこと、言語能力を高めること、人間関係を豊かにすることが明らかにされている(今井, 廖, 中村; 1993)。こういった経験が擬人化能力などに影響を与えている可能性が考えられる。

保護者へのインタビュー調査：ICを所有していた子どもたちは全員、ごっこ遊びやなりきり遊び、空想世界について語るなど、一人遊びが得意であった。また、絵本や本を読むことについての質問に関しても、全員が共通して「寝るときに毎晩読んでいた」という回答が得られた。絵本の読み聞かせに関しては、大学生を対象としたインタビューでも同様の結果が得られており、ICを有する者は絵本や本を読むことを保護者から奨励されていることが分かる。保護者は子どもと一緒にいる時間を大切にしていた。

ただし、ICを持っていた時期の子どもの様子について回答してもらったが、覚えていないことや記憶があやふやであることも多かった。それほど子どもの状態を不安視していなかったことが影響しているのではないだろうか。「(ICと遊んでいるのを見ても)多分放っておいたかな。自分ひとりの世界だったから」というように自由に遊ばせているという回答が見られた。このことから子どもを信頼している親子関係があったと言えるのではないだろうか。子どもたちには理解がある保護者のもとで、一人で自由に楽しめる環境があったことが考えられる。

加えて、インタビュー対象であった保護者全員が、一人遊びやごっこ遊びを子どもの“普通”の遊びとして捉えることができている可能性もある。子どもの様子を変だと思ったり不気味だと感じたりした場合は印象に残りやすい。その遊びの光景を何ら問

題のないものとして肯定的に捉えていたことも考えられる。

### (3) 幼稚園・児童養護施設を対象とした質問紙調査

幼稚園児、養護施設児ともに移行対象、空想の友達、ヒーロー空想の3因子構造が確認された(最尤法 promax 回転)。空想の友達とヒーロー空想については、幼稚園児と養護施設児とで項目数・内容に若干の違いが見られたが、齊藤ら(2012)とほぼ同じ因子構造であると判断できると思われる。次に、各因子の共通項目の出現率を比較したところ、移行対象とヒーロー空想では、全てにおいて養護施設児よりも幼稚園児に出現率が高いことが確認された。空想の友達については、養護施設児と幼稚園児に差は見られず、どちらも出現率は移行対象とヒーロー空想に比べ少なかった。空想的なものや遊びに親しむのは幼児の一般的な傾向である。それに比べるとICの出現については一般的に少ないが、環境の違いに関わらず一定の人数に出現することが確認された。ただし、ICの出現する環境要因やICとのやり取りなどについての検討は、本研究の(1)や(2)のような個人に焦点を当てた研究が必要であると思われる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計3件)

塚越奈美・山名裕子, 生活科における子どものつばやきに対する大学生・保育者・小学校教諭の読み取りの比較:「アサガオって字読めるのかあ?」の背景に何を読み取るか?, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第17巻, 2016年, 9-17. (査読無し)

塚越奈美・荻原ひろみ・山名裕子, 5歳児クラスの話し合いにおける論理的思考と直観的思考のゆらぎ: 担任による実践記録からの分析, 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第19巻, 2014年, 9-24. (査読無し)

塚越奈美, 願いごとに対する幼児の認識に影響を与える要因に関する検討: 現象に対する大人の肯定・否定と現象の目撃の有無に着目して, 心理科学, 第33巻, 2012年, 47-60. (査読有り)

#### [学会発表](計10件)

塚越奈美, 空想世界を楽しむ幼児の行動観察: 探索的事例検討, 日本心理学会第79回大会, 2015年9月23日, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市).

塚越奈美・山名裕子, 「アサガオって字読めるのかあ?」という小学1年生のつばやきをどう考えるのか?(1): 教師の認識と指導, 日本発達心理学会第26回大会発表, 2015年3月21日, 東京大学(東京都文京区).

山名裕子・塚越奈美, 「アサガオって字読めるのかあ?」という小学1年生のつばやきをどう考えるのか?(2): 大学生の認識, 日本発達心理学会第26回大会, 2015年3月21日, 東京大学(東京都文京区).

Nami TSUKAKOSHI, Teachers' cognitions of and correspondence to animism in Japan. The 15th PECERA Annual Conference, 2014-8-10, Bali, Indonesia.

塚越奈美, 幼児のファンタジー傾向に関する調査: 幼稚園と児童養護施設の比較, 日本発達心理学会第25回大会, 2014年3月21日, 京都大学(京都府京都市).

Nami TSUKAKOSHI, Transitional Object and Imaginary Companion in Japanese Infants, Poster presentation at the 16th European conference on developmental psychology, 2013-9-5, Lausanne, Switzerland.

山名裕子・塚越奈美・荻原ひろみ, 幼児の論理的思考と直観的思考(1): 5歳児クラスの「野菜を売る」実践記録にみられるゆらぎ, 日本心理学会第77回大会, 2013年9月20日, 札幌コンベンションセンター(北海道札幌市).

塚越奈美・山名裕子・荻原ひろみ, 幼児の論理的思考と直観的思考(2): 5歳児クラスの「ねずみばあさん」と「秘密基地づくり」の実践記録にみられるゆらぎ, 日本心理学会第77回大会, 2013年9月20日, 札幌コンベンションセンター(北海道札幌市).

塚越奈美, 幼児の対人葛藤場面での対処方略: 他者の特性の考慮に注目して, 日本発達心理学会第24回大会, 2013年3月17日, 明治学院大学(東京都港区).

塚越奈美, 幼児期における「秘密にする行為」の理解: 「親密度」による違いにも注目して, 日本心理学会第76回大会, 2012年9月12日, 専修大学(神奈川県川崎市).

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

塚越 奈美 ( TSUKAKOSHI, Nami )  
山梨大学・総合研究部・准教授  
研究者番号: 60523701